

2023 年 2 月

食料安全保障月報

(第 20 号)



令和 5 年 2 月 28 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 2 月食料安全保障月報（第 20 号）

目 次

概要編

I	2023 年 2 月の主な動き	1
II	2023 年 2 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「南米の穀物等の生産・輸出動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞ 2 月の米国産小麦輸出価格 (FOB) は主要輸出国の中で最高値	
	＜カナダ＞ 2022/23 年度の小麦の期末在庫量は史上最低の 3.5 百万トン	
	＜豪州＞ 収穫は 1 月末に終了、生産量は史上最高の 38.0 百万トン	
	＜EU27+英国＞ 飼料用とうもろこしの代替として輸入量は上方修正	
	＜中国＞ 2022/23 年度の小麦輸入は、豪州産が 57.9% を占める	
	＜ロシア＞ 生産量、輸出量とも前月から上方修正され史上最高	
	＜ウクライナ＞ 輸出量は前月予測から上方修正も、前年度比 28.3% 減少	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収の減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 生産量は史上最高、輸出量は世界第 1 位の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 17% 減	
3	コメ	15
	＜米国＞ 生産量減少により長粒種の輸出価格が更に上昇	
	＜インド＞ ラビ米の作付けはほぼ終了	
	＜中国＞ 2022 年の輸入量が関税割当数量を初めて超過	

<タイ> 2021/22 年度の輸出量は前年度から 22.1%増加
<ベトナム> 2021/22 年度は他の作物への作付け転換等で収穫面積が減少

II 油糧種子

大豆・・ 2 1

<米国> 生産量は減産、輸出も減少の見通し

<ブラジル> 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

<アルゼンチン> 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

<中国> 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し

<カナダ> 収穫面積は減少も、単収増加により増産

（参考1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7

（参考2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

特別分析トピック

ウクライナ情勢まとめ

【利用上の注意】

表紙写真：ブラジル パラナ州の成熟期を迎えた大豆（2月5日撮影）

天候に恵まれ生育状況は良好。2月末には収穫予定

ブラジル大豆生産量は1億5,000万トンの豊作が見込まれている。

(概要編)

I 2023 年 2 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球での収穫はほぼ終了し、南米では生育期から収穫期を迎えている。

品目別にみると、2月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、豪州やロシアの豊作で世界の生産量は前年度を上回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年3月には過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻しているが、引き続き高水準で推移している。前年7月のウクライナの穀物輸出に関する4者合意は3月19日で二度目の期限を迎えるため、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、米国や欧州、アルゼンチンの乾燥等の影響により、世界の生産量が前年度を下回る見通し。一方、大豆については、米国、アルゼンチンは減産も、ブラジルで増産となり、世界全体では増産となる見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：1月）については、12月から下落（132.2→131.2）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年1月の値は135.6、前々年1月の値は113.5）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値の3割程の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021年7月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023年2月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の2月17日報告によると、2022/23年度の小麦は収穫が終了し、収穫予定面積のほぼ100%に当たる2,020万トンが収穫された。収穫が遅れていたとうもろこしも収穫終盤となり、収穫予定面積の94%に当たる2,650万トンが収穫された。

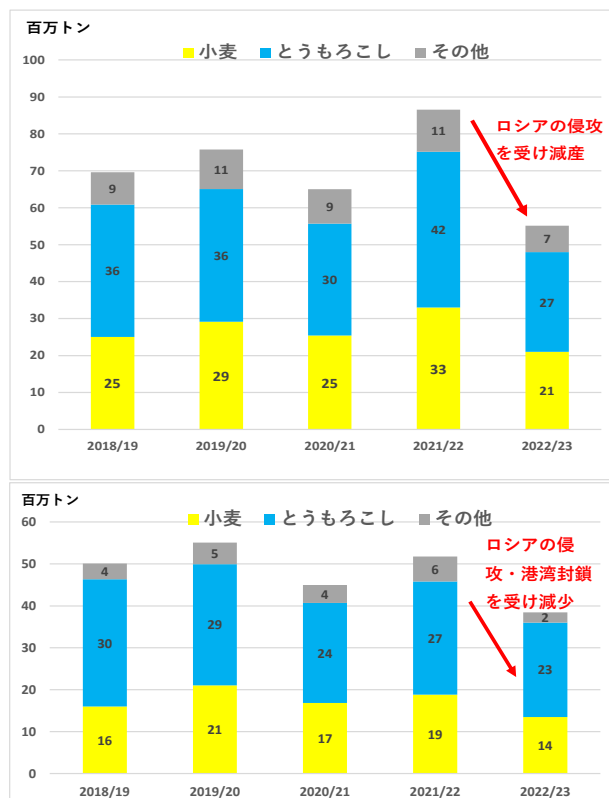
同省2月14日報告によると、2023/24年度の農作物の作付面積は、冬小麦の作付けがロシアの侵攻前であった2022/23年度と比較して、戦争の影響を受け減少し、前年より19%（700万ヘクタール）減の2,200万ヘクタールとなる見通し。2023/24年度の冬小麦の作付は、2022年11月28日報告によると計画面積の94%に当たる380万ヘクタールが終了（2022/23年度の冬小麦の作付面積は650万ヘクタール）。

米国農務省（USDA）の2月見通しによれば、2022/23年度の小麦の生産量は、前月見通しから変更なく2,100万トン（対前年度比36%減）、輸出量は前月から50万トン上方修正され1,350万トン（同28%減）の見通し。

一方、とうもろこしの生産量は、前月見通しから変更なく、収穫期の降雨過多やロシアの攻撃による収穫遅れにより2,700万トン（同36%減）、輸出量は、前月見通しから200万トン上方修正され2,250万トン（同24%減）の見通し（参考1）。

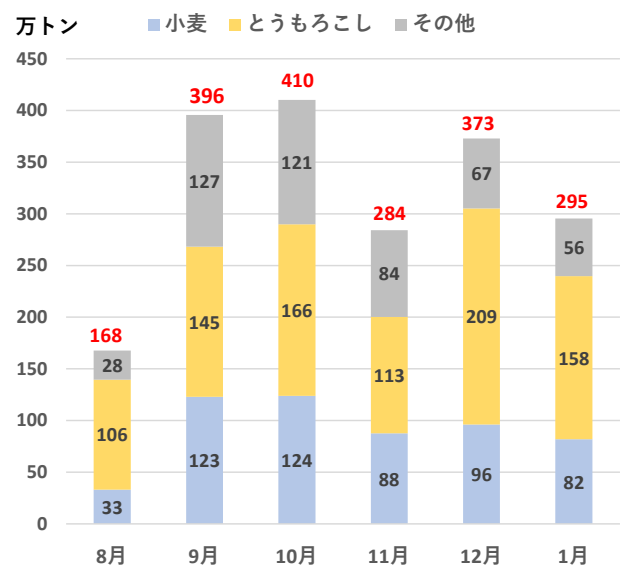
2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（当初は前年11月19日まで）を受け、前年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開されたが、2023年3月19日で2度目の期限を迎える。2022年8月～23年1月累計の輸出量1,926万トン（うち、とうもろこし898万トン、小麦546万トン他）。目的地は中国、スペイン、トルコ、イタリア等（参考2）。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量（上）、輸出量（下）の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.2） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



出典：国連資料（（2023.1月末時点）

注：その他はひまわり油・大麦など

陸路による輸出を除く。

1 中国の2022年の大豆輸入量は前年より減少。2023年は大豆播種面積増加見通し

中国の海関統計によれば、2022年の穀物の輸入量については、とうもろこしは2,062万トン（対前年比27%減）と大きく減少したものの、小麦は987万トン（対前年比2%増）、コメは616万トン（対前年比60%増）と増加した。

とうもろこしの輸入減は、国内産が史上最高の豊作となったこと、輸入元の米国・ウクライナの輸出が減少したことが要因。小麦は、3年連続豊作の豪州産の輸入量が前年より倍増し、輸入量の半分強を占めた一方、米国産、カナダ産が減少した。

コメについては、特にロシアのウクライナ侵攻などで小麦やとうもろこしの穀物価格が高騰していた2022年4～9月に、代替需要として碎米の輸入量が増加したことが輸入増の要因。前年11月以降、インドの輸出規制や洪水によるパキスタンの輸出減により輸入量は2020年及び2021年同期を下回った。

大豆については上記作物と異なり多くを輸入に依存しているが、2022年産大豆が史上最高の豊作となったこと等を受け、輸入量は対前年比6%減の9,110万トン。

一方、2月13日に、中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央一号文件が公表された。食糧生産6億5,000万トン以上の確保に加え、さらに5,000万トンの生産拡大のほか、大豆等の油糧種子の生産増大等が記載されている（※）。

※食糧安全保障法の制定に向けての取組についても言及されているが、詳細は記載されていない。

2 米国産穀物の輸出競争力低下

USDAの2月見通しによれば、米国産穀物については輸出価格が他の輸出国と比較して高く、輸出競争力に乏しいため、シェアが低下している。価格が高い背景としては、減産に加え、ミシシッピ川水位低下等に伴う国内輸送経費の高騰等によるものとみられる。このため、ロシア（小麦）、ブラジル（とうもろこし、大豆）の台頭を許すことになった。

品目別では、小麦は、豊作のロシアや豪州の価格競争力が強く、米国は5位（シェア10%）。

とうもろこしは、2012/13年度干ばつにより2位となった以降首位であったが、2022/23年度はブラジル（シェア28%）に抜かれ、米国はシェア27%の2位に転落。

大豆は、1位のブラジルのシェア55%に対し、米国は2位もシェア32%と大差。

コメは、インドやタイ、ベトナムなどアジア諸国の後塵を拝し7位（シェア4%）となっている。

3 ロシアは2月15日から6月末まで穀物輸出枠2,550万トン設定も輸出好調

USDAの2月見通しによれば、ロシアの2022/23年度の穀物生産見通しは史上最高の1億3,429万トン（前年度比17%増）。このうち、小麦は前月見通しから100万トン上方修正され、9,200万トン（同21%増）で史上最高となり、大麦も同様に50万トン上方修正され2,150万トン（同23%増、史上最高）、とうもろこしは1,400万トン（同8%減）の見通し。

また、USDAによれば、2022/23年度の穀物輸出量は5,254万トン（うち小麦4,530万トン）と前年度比29%増（小麦32%増）となる見通し。2月15日から6月30日まで穀物輸出枠2,550万トン（穀物の区分なし）が設定されたが、前年度同時期の輸出枠（小麦800万トン、とうもろこし、大麦、ライ麦計で300万トン）より大幅に増加していることや輸出税率が前年同期と比べ低いことが輸出増加の要因。

Ⅱ 2023 年 2 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、1 月末、280 ドル/トン前後で推移。2 月に入り、干ばつが継続していた米国の冬小麦産地での降雨予報等から、一時 270 ドル/トン台半ばに値を下げたものの、ロシアとウクライナの戦闘激化による黒海経由のウクライナ産穀物輸出の先行き懸念等から 290 ドル/トン台前半に値を上げた。その後、米国 FRB の利上げ懸念から値を下げ、2 月下旬現在、280 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、1 月末、260 ドル/トン台後半で推移。2 月に入り、米国産の低調な輸出状況や USDA の 2 月需給報告で米国の在庫がエタノール消費の減少により市場予想を上回った一方、アルゼンチンの高温・乾燥による減産懸念やブラジル大豆収穫遅れに伴う冬とうもろこしの作付け遅れ、ロシアとウクライナの戦闘激化による黒海経由のウクライナ産穀物輸出の先行き懸念等から値が小幅に上下し、2 月中旬現在、260 ドル/トン台半ばで推移。

コメは、1 月中旬、530 ドル/トン台後半で推移。2 月に入り、新穀の乾季米の市場への流通による供給増加見通しや、海外需要の軟化、パーツ安等により値を下げ、2 月中旬現在、490 ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、1 月末、560 ドル/トン台半ばで推移。2 月に入り、ブラジルの豊作見通しや中国の輸入需要の減退懸念の一方、アルゼンチンの高温・乾燥による減産懸念や大豆粕価格の上昇、ブラジル主産地での降雨による収穫遅れ等から値が小幅に上下し、2 月中旬現在、560 ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 110 万トン下方修正され 27.3 億トン。消費量は、前月予測から 20 万トン上方修正され 27.6 億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.5% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.3 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で上方修正され、27.6 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで上方修正も、コメで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

(注：数値は 2 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.4 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トン となり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り、18.9% となる見込み。

(注：数値は 2 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：南米の穀物等の生産・輸出動向

南米では2022/23年度の生育期を迎えており、一部で収穫も開始された。ブラジル南部からアルゼンチンにかけて、ラニーニャ現象を受け高温乾燥の影響等を受けた。特に、アルゼンチンでは過去60年間で最悪の干ばつとも言われ、小麦、とうもろこし、大豆とも減産見通しである。一方、ブラジルにおいては、主産地の中西部が生育期の降雨に恵まれ、大豆、とうもろこしとも史上最高の生産見通しとなり、いずれの品目でも世界一の輸出国になる見通し。両国の輸出動向と、世界の穀物等需給への影響についてまとめた。

注：文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、ブラジルのとうもろこしは2023年3月から2024年2月。国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 アルゼンチンの生産・輸出動向

(1) 天候

気象庁によれば、過去3年間のラニーニャ現象の継続が収束しつつあるも、アルゼンチンでは降雨の少ない状況が継続している。特に、2022/23年度の夏季は干ばつ状況が甚大で、ロサリオ穀物取引所の1月11日のプレスでは過去60年間で最悪の干ばつとも言われている。また、降水量不足で穀物の主要輸送路であるパラナ川の水位が大きく低下した。

本干ばつの影響を受け、1月中旬に収穫が終了した小麦、降雨不足で作付けが2月までずれ込んだ大豆やとうもろこしの生産見通しが低下した。1月後半に入り降雨があったものの、早い時期に植えた大豆やとうもろこしへの干ばつの影響の緩和には遅過ぎたとみられる。

(2) 大豆

干ばつの影響を受け、生産量は前年度より大幅に減少し、ブエノスアイレス穀物取引所の2月16日見通しによると前年度比14%減の3,800万トンと減産見通し。

アルゼンチンでは、大豆油や大豆油かすに加工して輸出される。米国農務省(USDA)によれば、丸大豆の輸出量は420万トン(対前年度比47%)で、輸入量625万トン(対前年度比63%増)を下回る見通し。

(3) とうもろこし

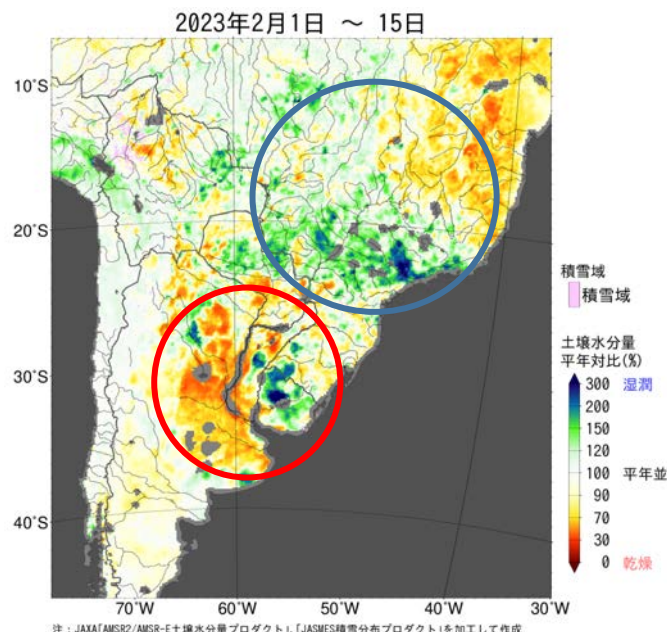
干ばつの影響を受け、生産量は前年度より大幅に減少し、ブエノスアイレス穀物取引所の2月16日見通しによると前年度比14%減の4,450万トンで、2017/18年度以来の低水準となる見通し。なお、USDAによれば、輸出量は現時点では3,500万トンと前年度(3,400万トン)を上回る見通しだが、今後の下方修正となる可能性もある。

表1 過去のエルニーニョ・ラニーニャ現象

エルニーニョ現象		ラニーニャ現象	
発生期間	季節数	発生期間	季節数
2002年夏～2002/03年冬	3	2005年秋～2006年春	3
		2007年春～2008年春	5
2009年夏～2010年春	4	2010年夏～2011年春	4
2014年夏～2016年春	8	2017年秋～2018年春	3
2018年秋～2019年春	3	2020年夏～2021年春	4
		2021年秋～	

出典：気象庁

図1 南米の2月前半の土壌水分量の平年対比(JASMAI)
ブラジル北部～中西部にかけ水分量が多く(青丸)
ブラジル南部～アルゼンチンにかけて少ない(赤丸)



注：JAXA/FAMS2/AMSR-E土壌水分量プロダクト、「JASMES積雪分布プロダクト」を加工して作成

(5) 小麦

ブエノスアイレス州など主産地において前年後半の生育期の降雨が少なく、生産量は前年度より大幅に減少し、ブエノスアイレス穀物取引所の1月見通しによると前年度比43%減の1,240万トンと2015/16年度以来の低水準。

USDAによれば、輸出量は750万トン（前年度1,598万トン）と半減の見通し。

(5) 輸出規制などの関連政策

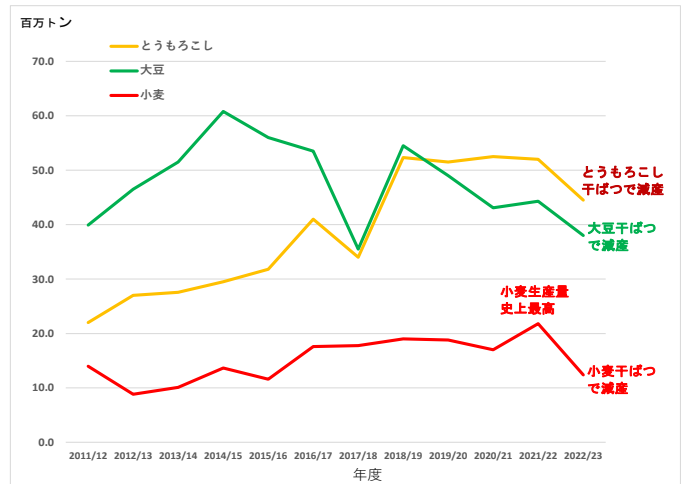
アルゼンチンは従来から国家財政の歳入不足を補うため、農産物輸出に対し輸出税を課している。特に大豆は最大33%と高い輸出税が賦課されている。大豆油・大豆油かすは31%、小麦・とうもろこしは12%となっており、コメや牛肉などにも広く輸出税が賦課されている。

また、とうもろこしや小麦については、国内供給を確保するために輸出上限数量が設定されており、2022/23年度のとうもろこしは2,000万トン、小麦は1,000万トン。

このほか、大豆は売り控え傾向にある農家による輸出を促すため、前年9月と12月に、特別な対ドル優遇為替レートが設定された。

今般の干ばつを受け、1月末以降、アルゼンチン政府や中央銀行は干ばつ被害を受けた農家への税制の優遇措置や融資の促進を決定した。今後、輸出規制について、干ばつを受けて強化されないか注視が必要である。

図2 アルゼンチンの小麦、とうもろこし、大豆生産の推移



出典：ブエノスアイレス穀物取引所（2023.2）

表2 アルゼンチンのとうもろこし・大豆・小麦の輸出規制

項目 作物	輸出税	輸出上限数量（年度別）	
		2021/22	2022/23
とうもろこし	12%	3600万トン	2000万トン
大豆	33%	-	
大豆油	31%		
大豆油かす	31%		
小麦	12%	1450万トン	1000万トン

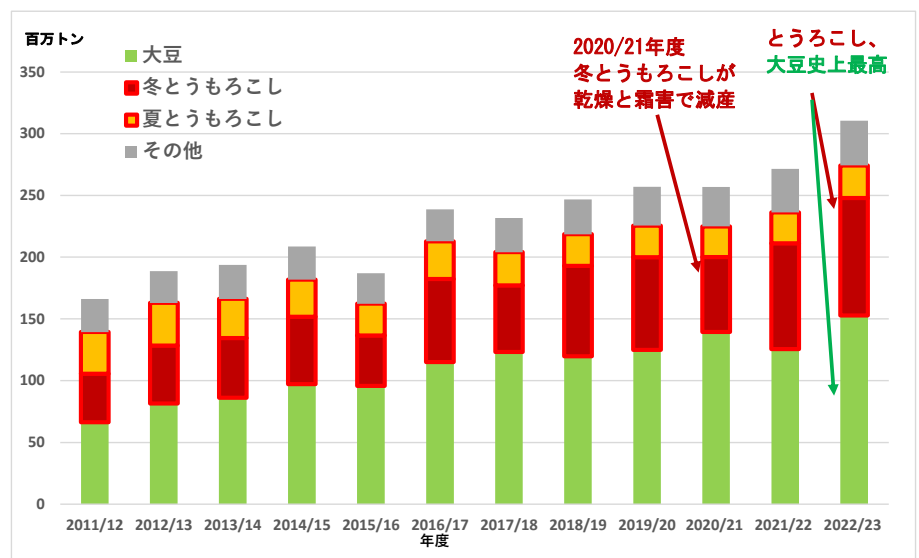
2023年2月時点

2 ブラジルの生産・輸出動向

(1) 天候

大豆の最大生産州のマト・グロッソ州を含む中西部から北部にかけて降雨に恵まれ、大豆を始めとする夏作物は順調に生育した。2月に入り収穫期を迎えたが、降雨過多により平年より収穫が遅れている。一方、アルゼンチンに隣接する南部地域、特にリオ・グランデ・ド・スール州では、乾燥天候で作柄に影響があったとみられる。

図3 ブラジルのとうもろこし、大豆生産の推移



出典：ブラジル食料供給公社（CONAB）（2023.2）

(2) 大豆

南部は降雨不足の影響を受けたが、主産地の中西部が降雨に恵まれ増産見込みのため、ブラジル食料供給公社（CONAB）の2月8日公表の穀物レポートによると1億5,290万トンと前年度比21.8%増で史上最高となる見通し。

(3) とうもろこし

大豆と同時期に作付けする夏とうもろこしと大豆収穫後の2月以降に作付けする冬とうもろこしがある。ここ数年、中国向け輸出の増加により大豆生産が大幅に増加していることから、大豆収穫後に作付けする冬作の生産割合が大きく増加し、夏作を大きく上回っている。CONABの2月レポートによれば、夏作2,650万トン、冬作9,720万トンの計1億2,370万トンで前年度比9.4%増の史上最高の見通し。現在、主産地の中西部で降雨過多による大豆の収穫遅れから、冬作の作付けも遅れており、冬作の生育期が遅れて、乾季までずれ込むことにならないか、一部で懸念されている。

(4) 小麦

ブラジルは、小麦は主産国でなく国内需要量が生産量を上回ることから、従来はアルゼンチンなどからの輸入に依存してきた。他方、2022/23年度においては、国内の自給向上の取組により作付面積が増加し、単収も向上したことから、CONABの2月レポートによれば、収穫は終了し、史上最高の1,060万トンとなり、コメの生産量（もみベース1,020万トン）を上回る見通し。USDAによれば、主食用は依然として輸入に依存しているとみられるが、アルゼンチンの不作もあり輸入量は減少する一方、飼料グレードの小麦については、サウジアラビアやベトナムなどへ輸出される見通し。

3 国際貿易の状況と南米の輸出動向

(1) とうもろこし

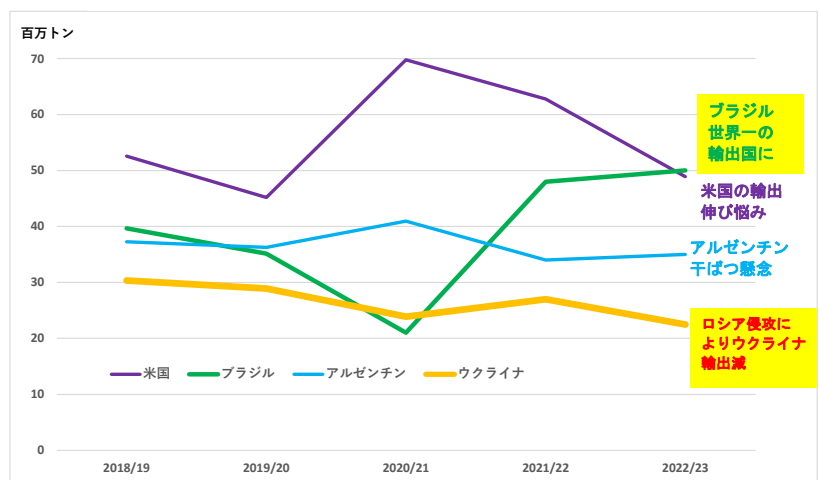
ブラジルでは、2021/22年度の冬とうもろこしが豊作、2022/23年度も豊作見通しを受け輸出量が増加し（5,000万トン）、韓国やベトナム、イラン向けも堅調なことに加え、中国向け輸出も前年末から開始されたこともあり、米国（4,900万トン）を抜いて従来からの大豆に加え、とうもろこしも世界一の輸出国になる見通し。

これに対し、アルゼンチンでは、干ばつにより更なる減産見通しとなれば、輸出量（3,500万トン）が減少する恐れがある。

その他輸出国では、ウクライナの輸出量がロシアの侵攻により減少、米国でも高温・乾燥による減産や国内輸送経費の高騰などで輸出価格が上昇し、輸出が伸び悩んでいる。

主要輸入国では、夏季の干ばつによりとうもろこしが大きく減産となったEUの2022/23年度の輸入量は2月見通しで200万トン上方修正され2,350万トンとなり、中国の輸入量（1,800万トン）を上回る見通し。EUは非GMOとうもろこしを生産しているウクラ

図4 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移

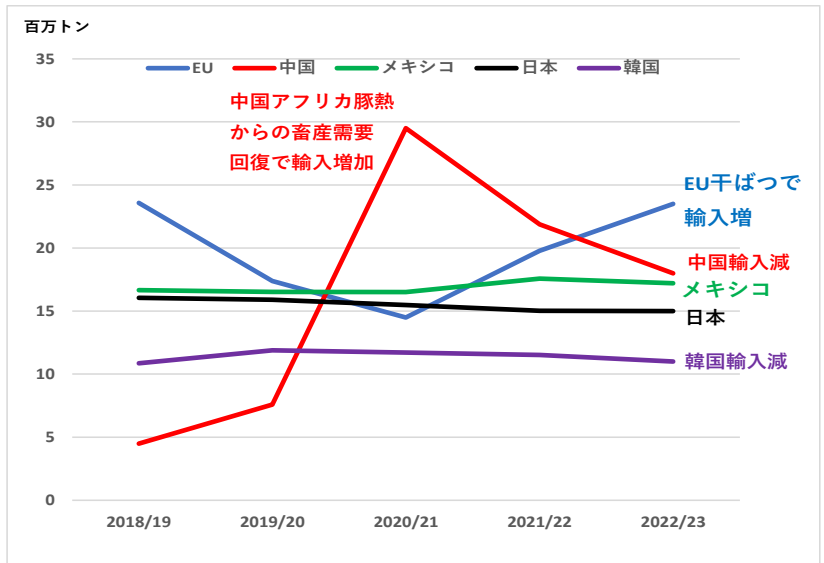


出典：米国農務省「PS&D」（2023.2）を農林水産省で加工

イナ産の輸入を黒海経由に加え、陸路輸送等により増加させた。

一方、中国は、海関統計によると、2021年はとうもろこしを2,836万トン輸入し、そのうち、米国産は1,983万トン、ウクライナ産は824万トンであった。一方、2022年は国内産が史上最高の豊作となったこと等から、輸入量は2,062万トンに減少（対前年比27%減）。うち米国産は1,486万トン、ロシアの侵攻の影響を受けたウクライナ産は526万トンとともに前年より減少となった。なお、前年11月からブラジル産の輸入を開始しており、2023年1月以降、海関統計に計上されるとみられるが、輸入先を多角化したいとの考えも背景にあるとみられる。

図5 主要とうもろこし輸入国の輸入量の推移（我が国は4位）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.2）を農林水産省で加工

(2) 大豆

ブラジルでは主産地のマット・グロッソ州などで生育期の適度な降雨に恵まれ、生産量の見通しは1億5,000万トンを超えることもあり、2022/23年度の輸出量は前年度より大幅に増加し（9,200万トン）、低調な米国の輸出量の減少分を補ってさらに余りある見通しで、世界の輸出量合計も増加する見通し。

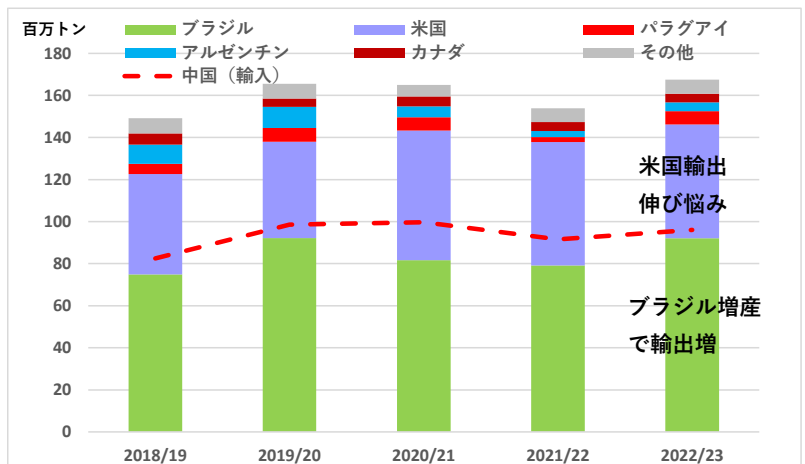
他方、アルゼンチンは、大豆かすや大豆油での輸出が中心で、数量は少ないが、とうもろこし同様、干ばつの影響により大豆の輸出が減少し、輸入増加となる恐れがある。

米国では、とうもろこし同様、減産に伴い、輸出が低調となる見通し（5,416万トン）。

世界最大の輸入国である中国の2022/23年度の大豆輸入量は、9,600万トンの見通し。他方、2022年の海関統計では、大豆輸入量は前年度比6%減の9,110万トンとなった。うち5,440万トンがブラジル産でシェアは6割。

中国は2月13日に公表された中央一号文件（例年、重要課題となっている農業を取り上げている）で、大豆の作付面積の拡大がうたわれている。また、2023年には、とうもろこしや大豆の遺伝子組換え作物の商業栽培を開始するのではとの報道もされている。2022年から人口が減少に転じ、景気減速も報道されている中、大豆を始めとする中国の今後の穀物需要や輸入、そして南米の輸出も含めた国際貿易にどのような影響を与えるか、引き続き注視する必要がある。

図6 主要大豆輸出国の輸出量の推移（参考：中国は輸入量）

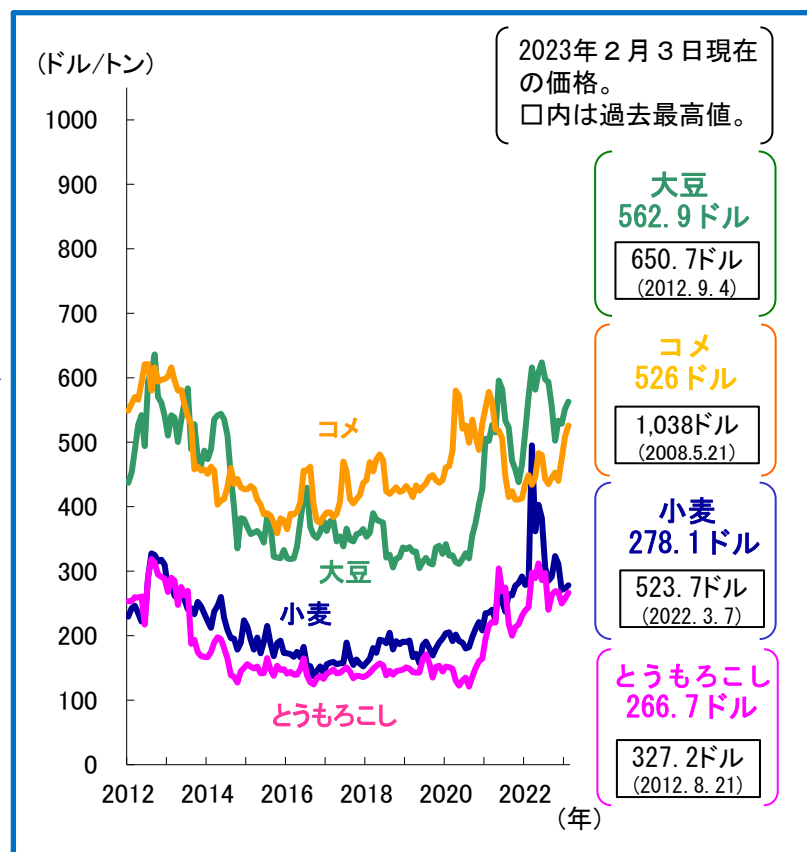
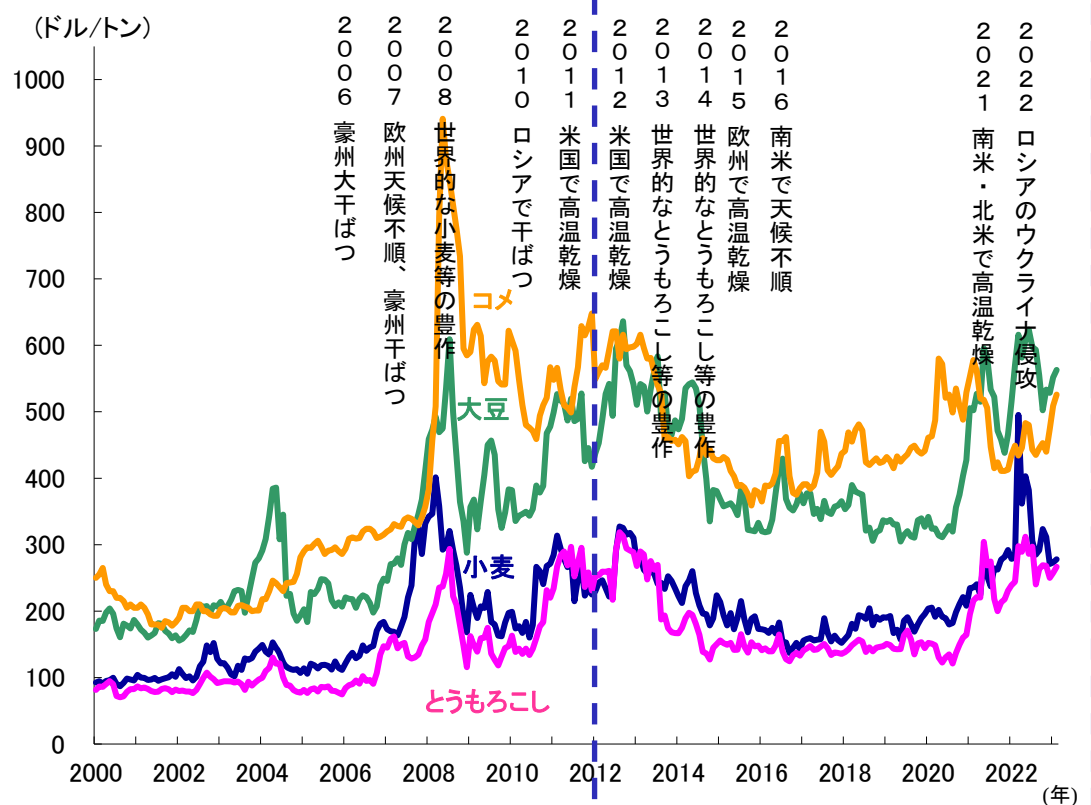


出典：米国農務省「PS&D」（2023.2）を農林水産省で加工

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



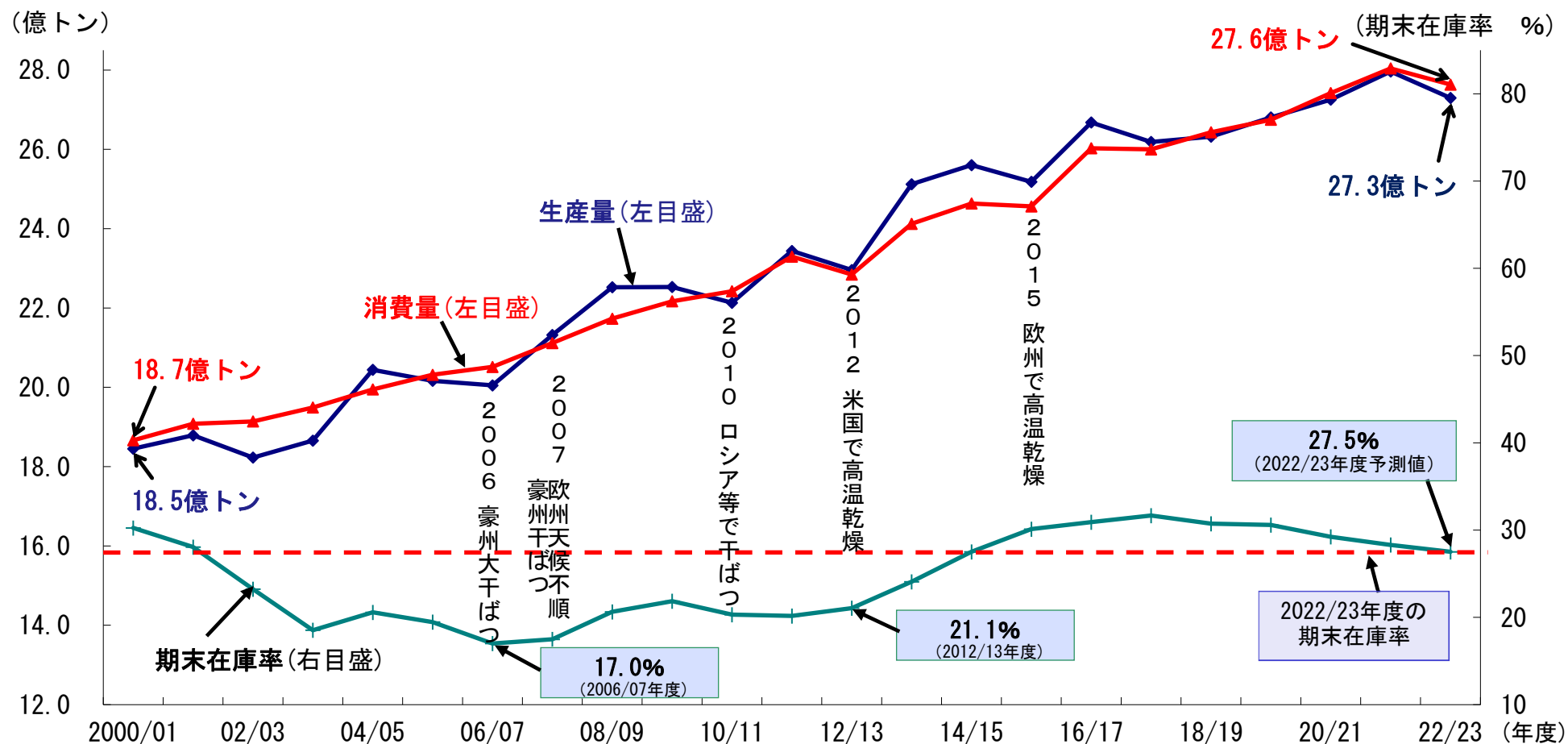
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

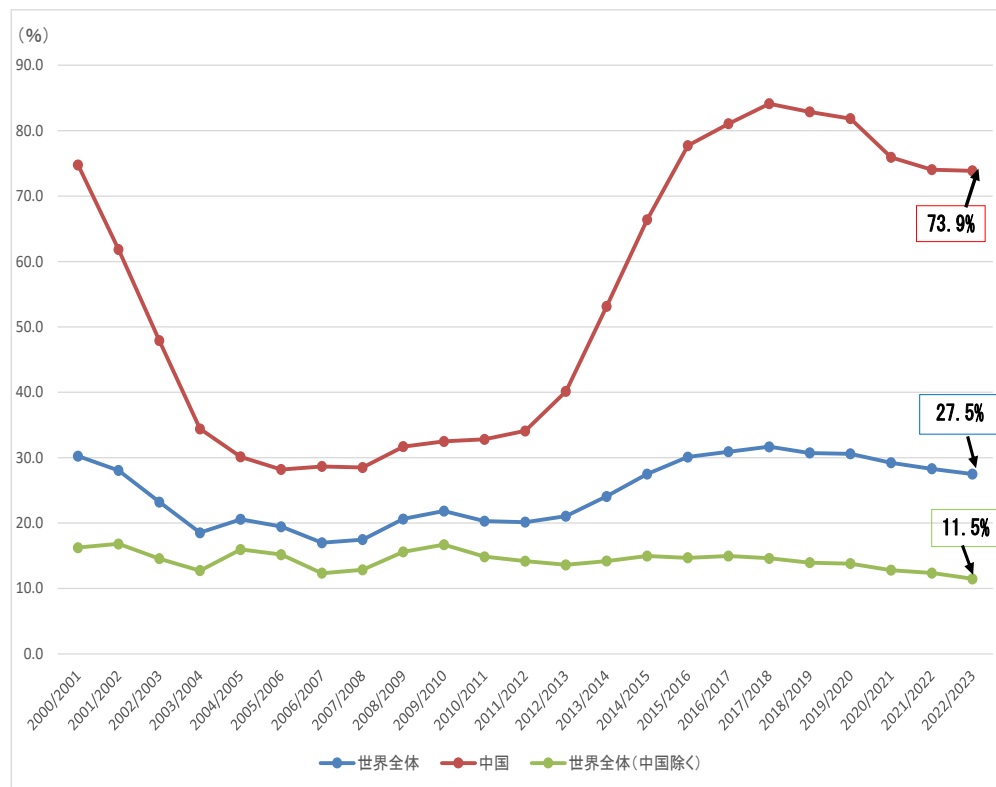


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(February 2023)、「PS&D」

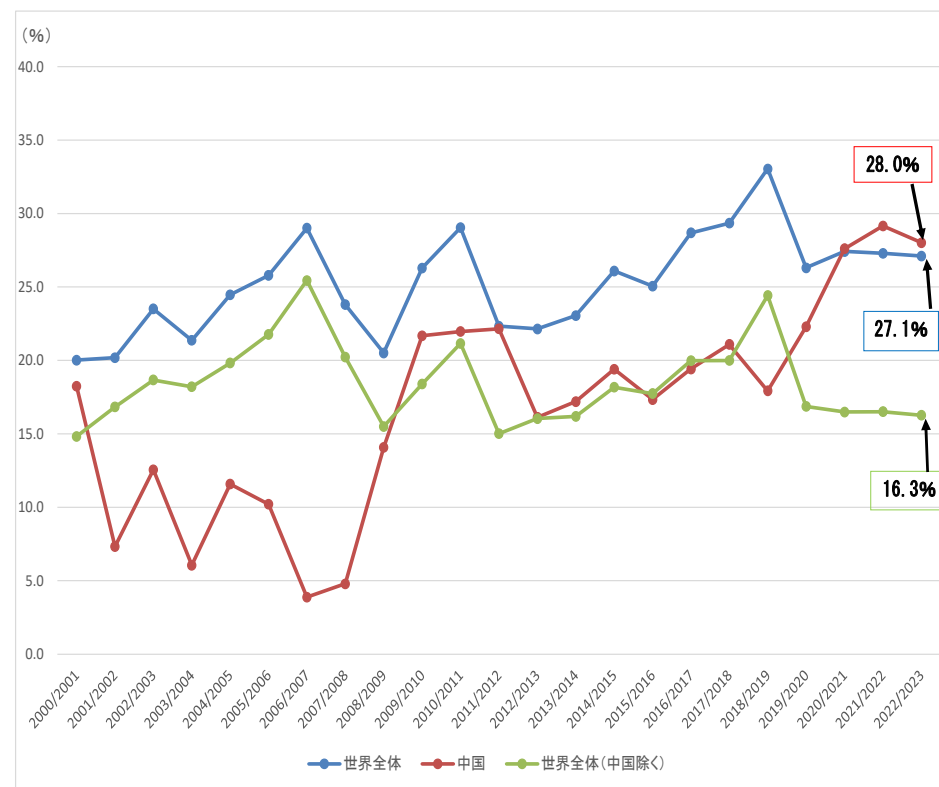
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(February 8, 2023)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

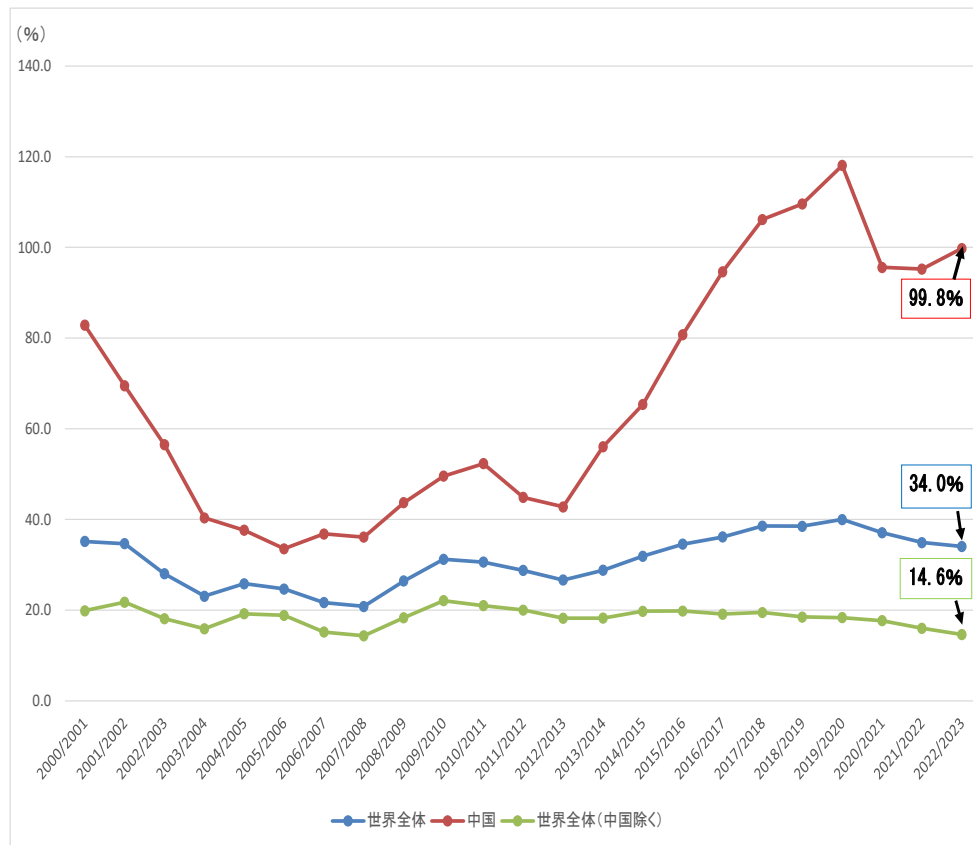
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

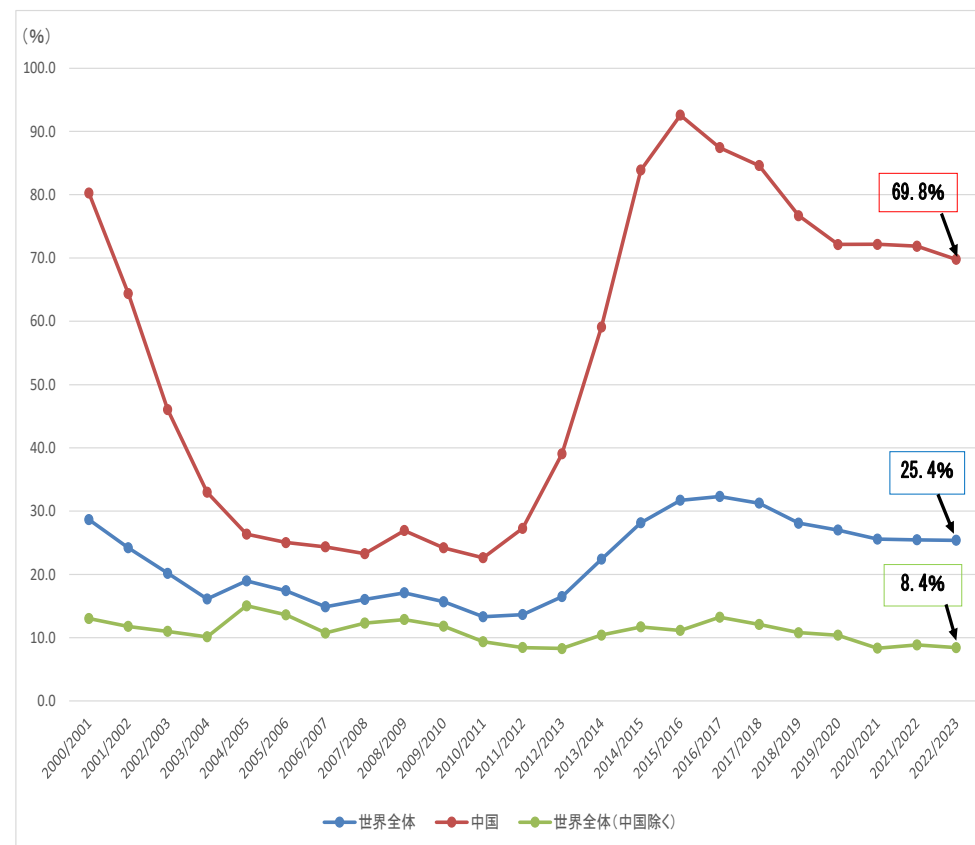
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(February 8, 2023)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

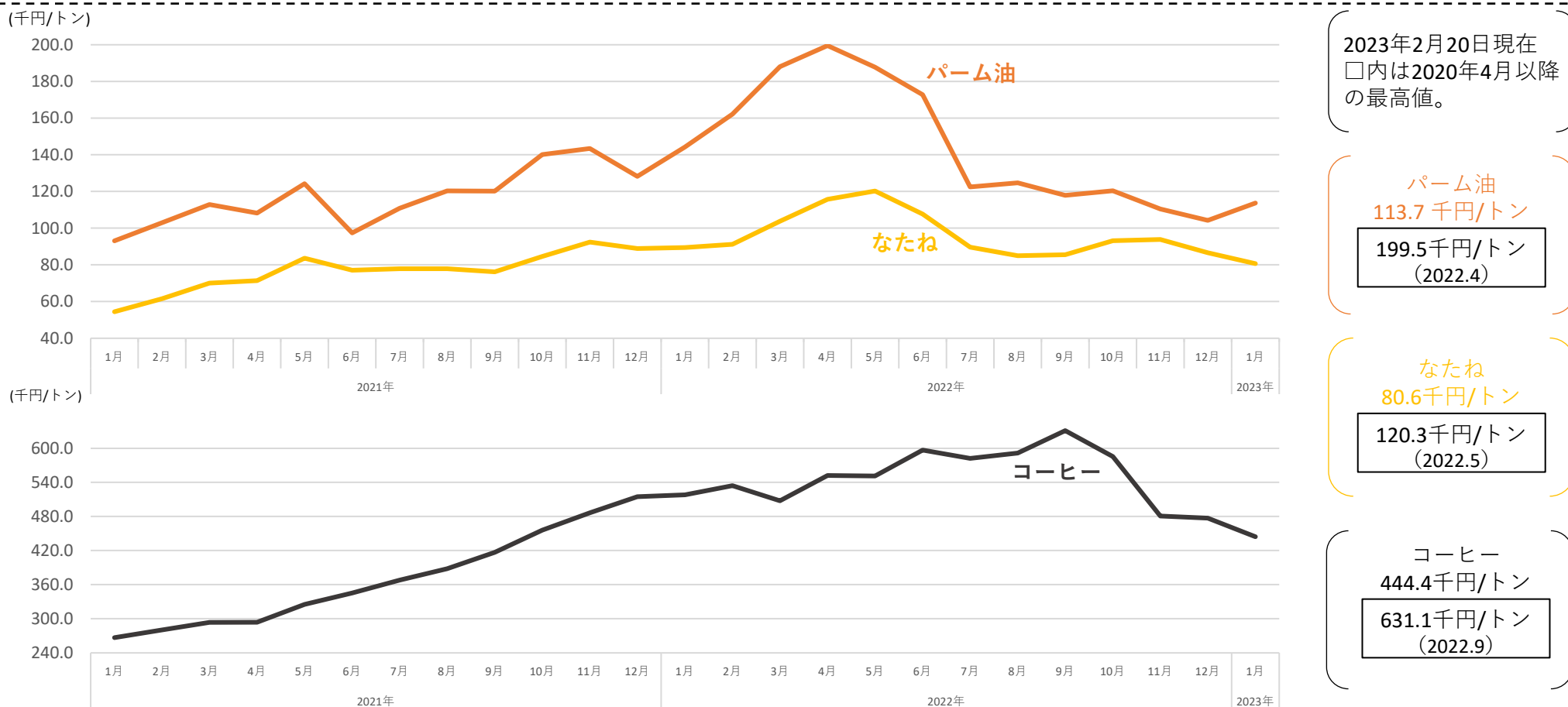
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

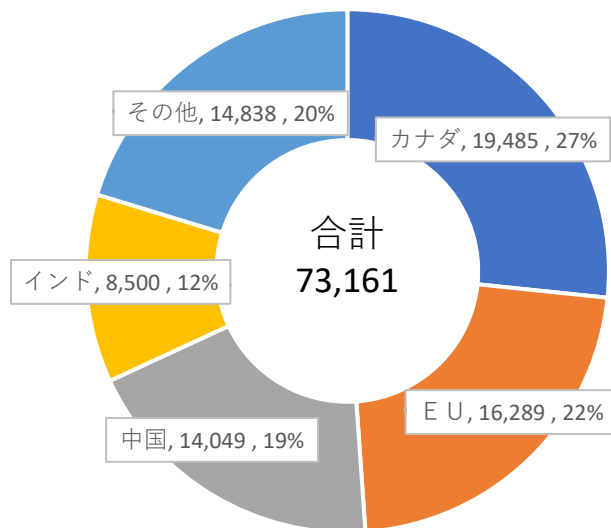
- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年**に熱波による減産があったが、**2022年**は回復基調から平年並みの収量に近づいた。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇したが、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降傾向にあるが、依然高値が続いている。



資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

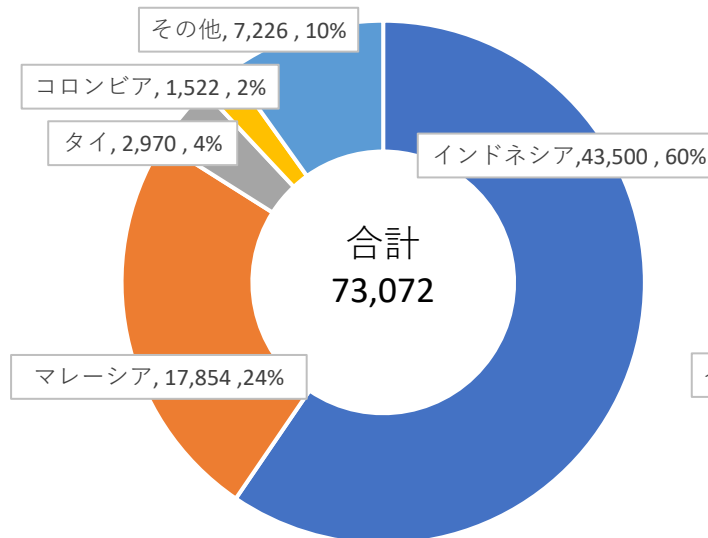
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



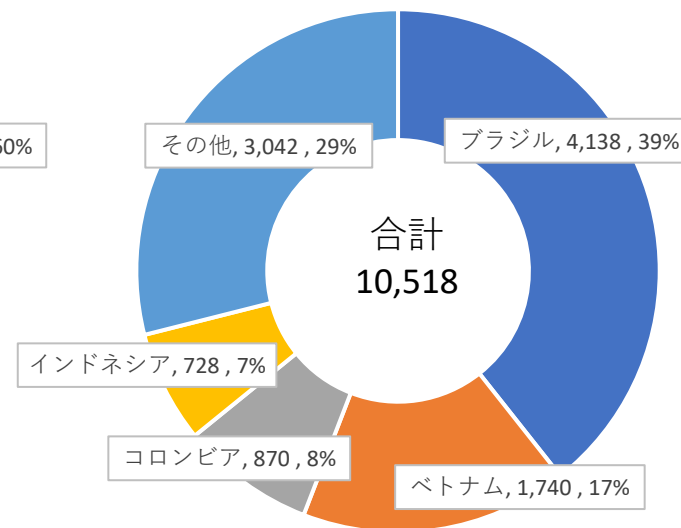
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	36.4%
ベトナム	100	25.0%
コロンビア	48	11.9%
その他	108	26.7%
合計	402	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
コーヒ一	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年1月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.6～164.0(前年同月比で－1.2%～31.7%)の範囲内。

消費者物価指数（総務省） (令和4年8月～令和5年1月)

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	114.4	113.8	113.7	114.2	114.1	115.0	11.5%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	114.9	112.4	112.3	114.2	111.6	113.1	12.6%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	105.1	106.7	108.3	109.1	109.9	110.3	7.8%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	150.4	156.8	160.2	162.7	162.5	164.0	31.7%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	100.1	103.4	103.6	104.9	104.4	104.5	6.3%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	126.5	127.0	133.7	136.1	137.4	137.3	22.3%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	106.6	113.2	117.1	118.6	117.5	119.2	21.0%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	99.4	98.7	98.8	98.5	98.7	98.6	－1.2%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	104.2	105.0	106.7	107.9	108.3	108.7	7.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） (令和4年8月～令和5年2月)

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4					R5			
品目	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	111.1	110.7	110.9	111.3	112.2	111.5	110.7	－0.7%	5.1%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	111.2	110.0	110.0	110.6	110.6	111.2	111.2	0.0%	13.0%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	103.7	104.2	107.2	107.2	107.6	108.5	108.1	－0.4%	6.9%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	148.3	156.8	160.6	161.2	161.2	162.2	162.2	0.0%	32.0%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	100.4	101.7	102.5	102.7	102.7	102.3	103.4	1.1%	5.4%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	118.3	116.9	126.2	128.9	128.3	129.6	128.9	－0.5%	21.7%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	104.5	108.0	114.4	115.4	110.9	116.9	118.4	1.3%	20.1%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	99.3	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	0.0%	－1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年3月号（2月24日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）11月の牛肉輸出量は減速も、22年累計では前年増を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002612.html

（EU）牛肉の外食需要の回復および供給量の低迷から価格は堅調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002613.html

（豪州）牛群再構築の完了で、23年の牛肉生産量・輸出量は増加の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002614.html

（NZ）と畜頭数の増加を受け22/23年度の牛肉生産量、輸出量ともに前年度を上回る見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002615.html

◆豚肉

（カナダ）と畜頭数の減少などから、22年の豚肉生産量はわずかに減少の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002616.html

（チリ）22年1～11月の豚肉輸出量、中国向けを中心に大幅な減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002617.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）22年11月の乳製品輸出量は好調に推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002618.html

（EU）生乳出荷量は増加、乳製品価格は下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002619.html

（NZ）生産者支払乳価、乳製品国際価格の下落基調を反映し後退の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002620.html

（中国）生乳生産量は増加するも乳製品需要は振るわず

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002621.html

◆飼料穀物

（世界）世界の期末在庫は前月に引き続き3億トンを下回る見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002622.html

（世界）米国などの大豆生産量は下方修正も、世界の期末在庫は1億トン台を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002623.html

（米国）米国の輸出量は前年度比22.1%減と大幅に減少する見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002624.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002625.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料:FAO「Food Price Index」(2023.2)より作成

注:穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等